

Abstract

ブラジルの血友病患者における頭蓋内出血

Intracranial haemorrhage among a population of haemophilic patients in Brazil

S. V. Antunes, P. Vicari, S. Cavalheiro and J. O. Bordin

頭蓋内出血（ICH）は血友病患者における合併症および死亡の主因である。血友病患者全体における ICH の発生率は 2.2 ～ 7.5% と報告されている。我々は 1987 年から 2001 年にかけて、サンパウロ国立大学附属病院の血友病医療施設に通院していた血友病患者 401 例を対象に、ICH の発生率、発生年齢、発生部位、臨床徴候、外傷との関連、さらにヒト免疫不全ウイルス（HIV）感染やインヒビターの有無との関連について評価した。ICH は CT スキャンにより確認した。結果として、401 例中 35 例（8.7%）に 45 件の ICH が認められた。発生年齢は 4 日～49 歳（平均 10.6 歳）であり、45 件のうち 24 件（53.3%）は外傷が直接的原因であった。また、出血部位は以下の通りであった — 複数部位 17 件

（37.8%）、硬膜下出血 12 件（26.7%）、クモ膜下出血 7 件（15.5%）、硬膜外出血 4 件（8.9%）、脳内出血 2 件（4.4%）、脳室内出血 1 件（2.2%）。最も頻度の高かった症状は頭痛と嗜眠状態であった。全患者に補充療法が実施され、8 例（17.8%）には脳神経外科手術が施行された。しかし、治療も虚しく、3 例（8.6%）の血友病 A 患者が ICH により死亡し、他の 3 例では遅発性後遺症が認められた。血友病患者の ICH 治療において最も重要なことは、早期に補充療法を行うことである。これを行うことにより、予後をより良好にすることができると考えられる。他の有効な対策として、頭部外傷が発生した場合は、軽症と判断されても常に欠乏凝固因子を補充することが挙げられる。